

【vol.61】 デイミニッシュスケールを使う時 ~その3~

どうも、大沼です。

今回は前回に引き続き、マイナーキーのV7の上での
デイミニッシュスケールの使い方ですね。

具体的には、スケールの切り替え時にそれぞれのポジションが
見やすくなる法方と、それらの実戦譜例です。

これまでの譜例を弾いていけば、そろそろ、デイミニッシュの響きを
耳で実感出来ているのではないかと思います。

後はデイミニッシュのポジションに慣れて、
左手のスケール切り替えの感じが掴めれば、
自由度が上がってくるでしょう。

なんだかんだいって、マイナーのV7でデイミニッシュを使うのは、
結構王道のワザなので、今後、なにかしらの曲で出てくる事もあると思います。

普段、自分でアドリブする時に使っても良いですし、
コピーしている曲に出てきたりしたら、
これまでやってきた事の効果を特に実感できるでしょう。

それでは、始めていきましょうか。

繰り返しになりますが、今回は、

マイナーキーのドミナント7thコードの上でデイミニッシュ・スケールを使う

の実戦編ですね。

前回の長ーい解説を踏まえたものなので、「ちょっと内容が怪しいな」という人は、
復習しつつやっていきましょう。

ではまず、練習するコード進行なのですが、候補の1つとしては、
前回は載せた、マイナーのツーファイブの進行ですね。

譜例 1、key=Am、II m7(♭5)→V 7→I m7

Aマイナーペンタ → デミニッシュスケール → Aマイナーペンタ

The image shows a musical score for a progression in the key of Am. It consists of three measures: Bm7(♭5), E7, and Am7. The first measure is labeled 'Aマイナーペンタ', the second 'デミニッシュスケール', and the third 'Aマイナーペンタ'. The E7 section is enclosed in a red box. The score includes a treble clef, a 4/4 time signature, and guitar TAB for strings T, A, and B. The dynamics are marked 'mf'.

例えばこんな感じで、key=Am の進行ならば、使うスケールを E7 の所で Aマイナーペンタから dim スケールに切り替える、という事が考えられますね。

その、ドミナント 7th 上で使う dim スケールのトニックはどの音になるのか？についてですが、A ハーモニックマイナーのダイアトニックコードを基準に考えるならば、G#dim スケールと見るのが理論的には正しいような気がします。

ですがまあ、ぶっちゃけた話、自分にとってわかりやすい音をトニックとして見てもらって構いません。特に決まりは無いですからね。

デミニッシュスケールは等間隔で構成音が並んでいるので、スケールを構成している 4 音の内、どの音をトニックに見てもスケールの形は変わりませんね。

※A ハーモニックマイナーのモードスケール

AmM7	ハーモニックマイナー
Bm7 ♭ 5	ロクリアン 13th
CaugM7	アイオニアン #5
Dm7	ドリアン #4
E7(♭ 9)	ハーモニックマイナー P5thピロウ
FM7	リディアン #9
G#dim7	オルタード ♭ ♭ 7

↑↑

dimスケールはここから来ている、と言う事は認識しておく
(もっと正確に言えば、ハーモニックマイナーのモードから来ている、と言える)

(※↑のコードとモード・スケールは無理に全部覚えなくても良いです。)

後、前回こんな画像も載せましたね。

Bロクリアン
 (=Aエオリアン=Aナチュラルマイナー)

G#ディミニッシュ
 =Bディミニッシュ
 =Dディミニッシュ
 =Fディミニッシュ

Aエオリアン=Aナチュラルマイナー
 Aマイナーペンタ

Aマイナーペンタ

※このE7(V7)上で使えるスケールには
 他にも選択肢がありますが、今回は
 ディミニッシュのみで考えましょう。

この様に、コード、スケールどちらも G#dim=Bdim=Ddim=Fdim となるので、
 結局、どの音をトニックに見ても、スケールポジションは変わりません。

では、それぞれの確認が済んだところで、実際にプレイする時に
 Aマイナーペンタ(or Aナチュラルマイナースケール)と dimスケールの
 切り替えがしやすくなるポジションの見方と、サンプルフレーズにいきましょう。

まず、最初の方に、譜例としてツーフाइブの進行を載せましたが、
 練習用としてはもっとわかりやすい進行にしたいので、
 I m7とV7の2つのコードのみでループするモノに変えましょうか。

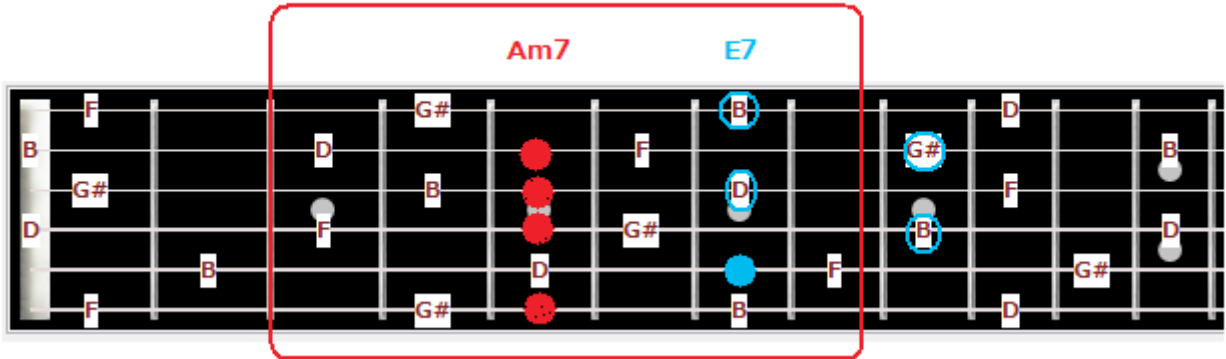
譜例2、key=Am, I m7-V7

使うスケールをじっくりと確認しやすいように、それぞれのコードを2小節ずつ、
 長めにとってみます。

で、Am7の上では、Amペンタ(やAナチュラルマイナースケール)を、
 E7の上では、G#dimスケールを使うわけですね。

次に、スケールポジションを切り替える時の効率の良い見方ですが、5〜7フレット周辺だと、G#dim スケールはこの辺のポジションで、コード進行である Am7 と E7 それぞれのコードはこの様に見ることが出来ますね。

図1、5〜7フレット周辺の G#dim スケールと Am7、E7 コードの代表ポジション
G#dimスケール



もちろんコードフォームはこれ以外にも考えられますし、丸で示した場所以外のコードトーンも狙います。

何にせよ、重要なのは“インターバルで考えること”ですね。

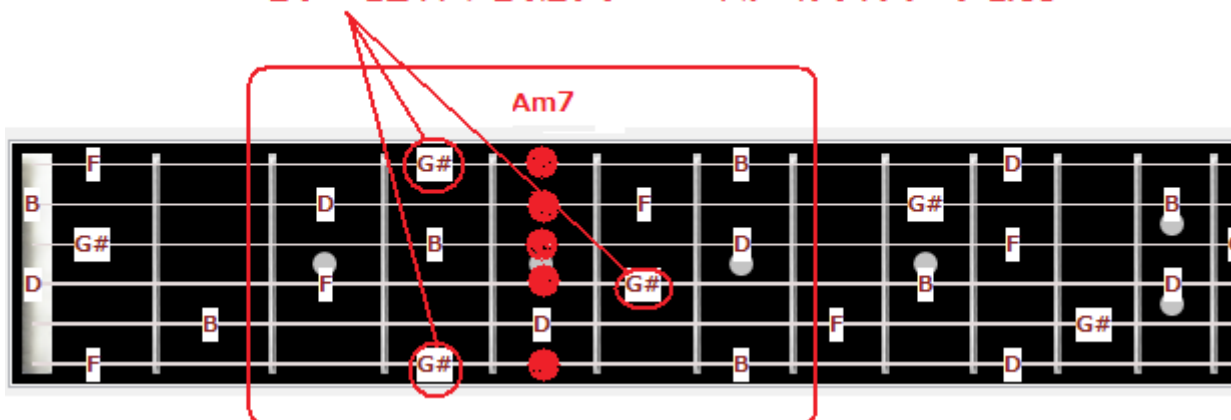
さて、この辺りのポジションで、Am ペンタなどから、G#に始まる4音のどれかをトニックにした dim スケールを切り替えたい場合、大きく分けて2つの見方が出来ます。

1つは、Am7 コードのルート、A 音の半音下の G#音を基準に dim スケールを見る方法
もう1つは、E7 コードのルート、E 音の半音上の F 音を基準に dim スケールを見る方法

と、こんな感じです。

図2、Am7 コードのルート、A 音の半音下の G#音を基準に dim スケールを見る

このG#を基準に、この辺りのG# dimスケールのポジションを見る



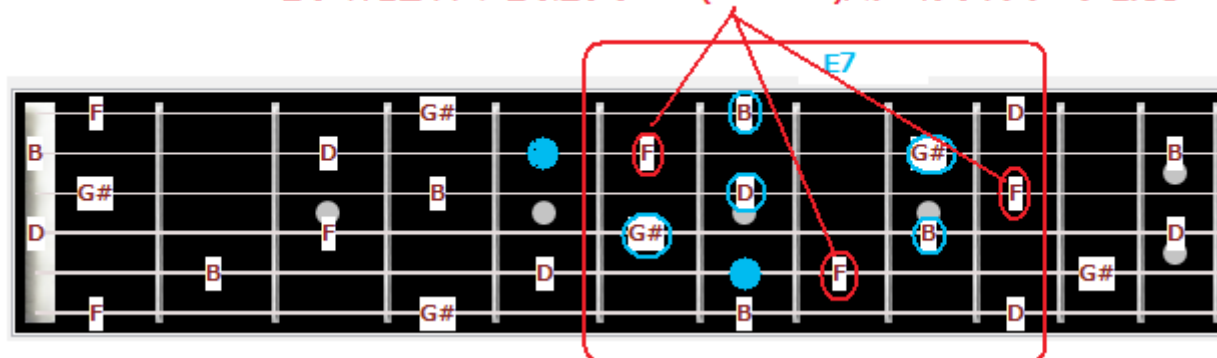
ちなみに僕自身は、↑の見方で見ると、
『“その key の I m7 の 1 弦のトニック” の半音下からスタートする dim スケール』

として見えています。

(※今回の進行ならば、1弦5フレットA音の半音下のG#音を基準にdimスケールを見ている、と言う事です。ただし弾こうとしているフレーズによっては変える事もあります)

図3、E7コードのルートE音の半音上のF音を基準にdimスケールを見る

このF音を基準に、この辺りのFdim(=G#dim)スケールのポジションを見る



こちらの場合は、

『“そのkeyのV7の5弦のトニック”の半音上からスタートするdimスケール』
として見ている事が多いです。

(※今回の場合ならば、5弦7フレットE音の半音上のF音を基準に見ます)

この様に、そのkeyの重要なダイアトニックコードの(コードトーン)位置と、
切り替えたい先のスケールの構成音が隣接する場所を目安にするのです。

今回は、I m7とV7の両方から見る方法を解説しましたが、
最終的に弾くものは同じなので、実際に弾く時はどちらの見方でも構いません。

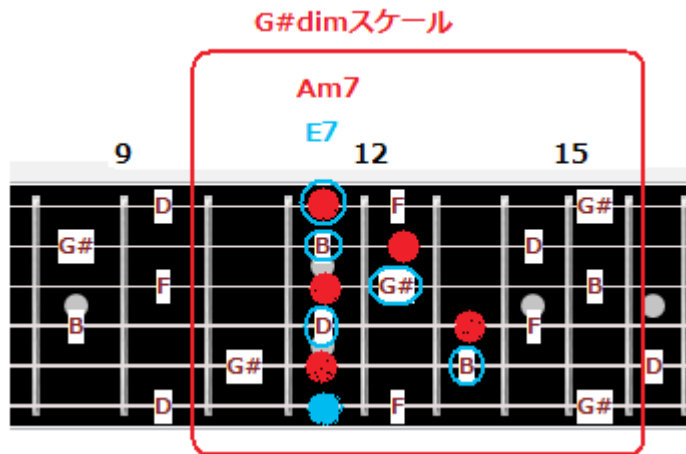
この2つのどちらかの方法(見方)で、E7上で弾くG#dimスケールのポジションを見ている、
と言う事ですね。

フレーズによっても見やすい方は変わるのでしょうし、もちろん
G#dimスケールの他の構成音を基準に見てもOKです。

後は、今はI m7が6弦ルート、V7が5弦ルートのコードフォームを基準に見ていますが、
逆に、I m7が5弦ルート、V7が6弦ルートの場合もdimスケールをどう見るべきか、
自分なりに探ってみてください。

(※切り替えの基本的なロジックは同じです)

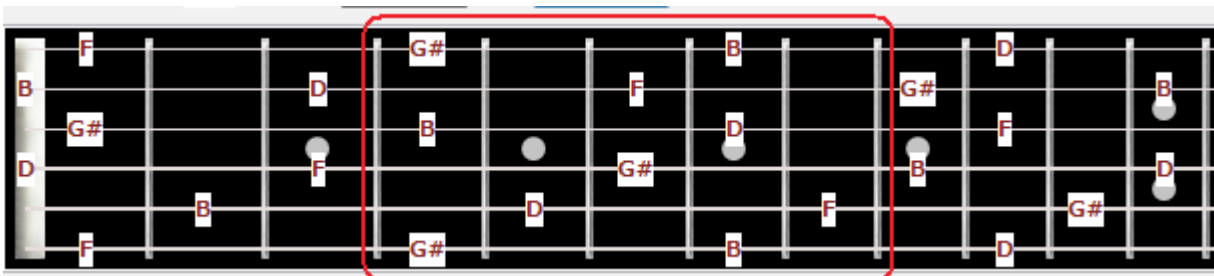
図4、Am7、5弦ルート、E7、6弦ルートのコードポジションとG#dimスケールの位置



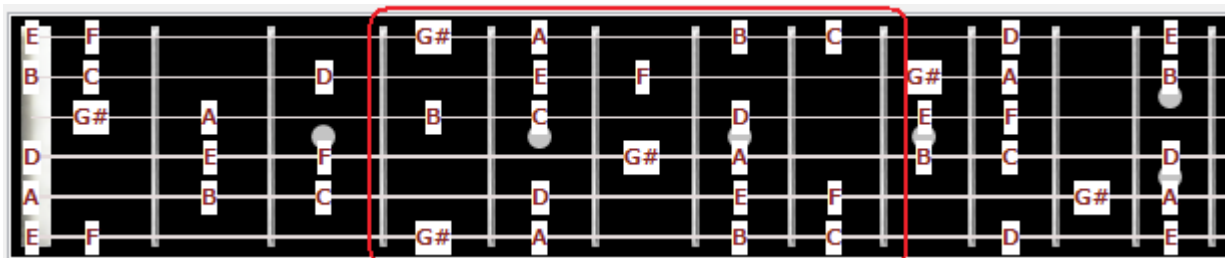
と、それぞれこの様な見方でAmペンタなどから、V7の上で弾けるdimスケールを切り替えるのが最もわかりやすいでしょう。

ちなみに、G#dimスケールは、Aハーモニックマイナースケールの構成音の中に全て収まっているので、以前覚えたハーモニックマイナーのポジションの中に見ることができます。

G#ディミニッシュスケール



Aハーモニックマイナースケール



この辺りの関係性も確認しておきましょう。

さて、またまた長々と解説が続きましたが、実戦譜例に行きましょうか。

改めて、題材となるコード進行はこれですね。

The image shows a musical score for guitar. The top staff is in treble clef with a 4/4 time signature. It contains four measures of whole notes. The first measure is labeled 'Am7' and has a '1' above the note. The second measure is labeled 'E7' and has a '2' above the note. The third measure is labeled 'Am7' and has a '3' above the note. The fourth measure is labeled 'E7' and has a '4' above the note. The bottom staff is labeled 'TAB' and is empty.

単純に、Am7 上では Am ペンタ等を使い、E7 上では G#dim スケールを使う、
と言う練習です。

スケールのスムーズな切り替えを意識しながら、目と耳のどちらも使って、
“感じ”の違いを掴み取ってください。

譜例のテンポは大体 100~120 くらいを想定しています。
(※弾きにくければもっと遅くてもいいです)

dim スケールでフレーズを弾く時の指使いは、慣れ、というか、
そのポジションに対してどう指を置いていくのか？みたいな所を
その都度考えていく必要があります。

これは、dim スケールだけではなく、その前後にどういうフレーズを弾くのか？にも
影響されますね。

ポジション変換の際、左手(基準にしたい指)の位置をリセットしたくなる場面が
あると思うので、そういったときはロングトーンやスライド、休符、スタッカートなどを
交えてみたりするのも良い手段です。

色々指使いを試してみて、自分なりにじっくりくるモノを選んでいきましょう。

それでは、譜例は以下です。

練習譜例

Am7 E7

S-Gt

mf

full full

E7 Am7

E7

TAB

TAB

TAB

※譜面が大きくなってしまったので、続きは次のページへ。

The image shows a musical score for guitar, consisting of three systems. The first system is for the Am7 chord, starting at measure 11. It features a treble clef staff with a melody and a bass staff with TAB notation. The melody is marked with a mezzo-forte (mf) dynamic. The TAB notation includes fret numbers and accents labeled 'full'. The second system is for the E7 chord, starting at measure 13. It also features a treble clef staff with a melody and a bass staff with TAB notation. The melody includes a triplet and a slur. The TAB notation includes fret numbers and a 'V' symbol. The third system is for the Am7 chord, starting at measure 15. It features a treble clef staff with a whole note chord and a bass staff with TAB notation showing the fret number 13.

譜面ではストレートのリズムになっていますが、ファンク系の16ハネのリズムで弾いても、わかりやすいかもしれません。

フレーズは Am7 の部分は全体的にマイナーペンタ系ですね。

ディミニッシュの部分は、スケールポジション的には、比較的、わかりやすいフレーズにしてありますが、最初は指使いで迷うと思います。

前後関係を考えて、弾きやすい指使いを探してみてください。

ではまた次回。

ありがとうございました。

大沼